

第5分科会

ことばの教育は いかに変わる"べき"か

報告者

山中 司 氏 立命館大学 生命科学部 教授
牛窪 隆太 氏 東洋大学 国際教育センター 准教授

コーディネーター

住田 哲郎 氏 京都精華大学 共通教育機構 准教授

ことばの教育はいかに変わる“べき”か

コーディネーター

京都精華大学 共通教育機構 准教授 住田 哲郎

○本分科会のねらい

いわゆる生成 AI 技術の進化に伴い、いま高等教育では従来の教育手法や価値観が見直され、新たな教育のあり方を模索する必要性が高まっている。高等教育におけることばの教育は、コミュニケーション能力を高めつつも異なる文化を理解できるグローバルな人材を育成する上で必要不可欠である。その一方で、生成 AI 技術の普及により、言語学習のアプローチや教育メソッドが変化し、従来の授業体系とは異なる形での学びも可能となっている。このような文脈の中で、本分科会では2名の専門家にご登壇いただき、高等教育の現状を振り返りつつ、今後のことばの教育や留学生支援の展開（何が変わるのか、いかに変わるのか）について、参加者とともにより理解を深めながら、未来のことばの教育の方向性を模索することを本分科会のねらいとした。

○報告の概要

まず、立命館大学の山中司先生に「ChatGPT が革命的に変える学びの形：英語教育などを例に」という題目でご講演いただいた。以下は、その概要である。

現在、生成 AI は大学の英語教育にも導入されつつあるが、模索が続いている。導入には課題があり、教員たちは生成 AI の基礎知識や教育における評価方法、教授内容の設定などについて悩んでいる。社会では既に一部で利用されており、特にビジネス業界での活用が顕著であるが、意外にも学生たちはまだ生成 AI をあまり利用していない。英語教員の役割は変わるかもしれないが、教員の必要性は変わらない。

英語教育に目を向けると、生成 AI は個々のレベルに合わせた出力が可能であり、ChatGPT の出力を真似た方が英語を学ぶには効率的であるとも言える。自律的に学びを進める学生にとって、ChatGPT は有用なツールになるだろう。しかし、生成 AI には問題もあり、学生が受け身になってしまう可能性もある。そのため、学生にとって取り組み甲斐のある課題を与えることが重要であり、自己表現や自己評価のスキルを育むためにも、生成 AI を上手に活用する必要がある。

次に山中先生のご講演を受け、東洋大学の牛窪隆太先生に「生成 AI は教育実践をどのように変えうるか：日本語教育からの問い」という題目でご発表いただき、指定討論者として山中先生と議論していただいた。以下は、その概要である。

日本語教育の実践はトレンドによって変化はしてきたが、根本的な変化は少ない。教師の信念や組織の特性が教室活動に影響を与えており、教育の革新にはこれらにアプローチする必要がある。

生成 AI は教育ツールとして効率化を促すだけでなく、自律学習ツールとしても機能する可能性があり、この二つの側面の齟齬が今後の課題となるだろう。言語学習が先行し、言語教育がそれを促進するという発想の転換が必要であるが、AI の導入により、日本語の正確さの評価や教室の意義についても再考する必要がある。教師は AI の活用方法を考えるだけでなく、教育から学習への視点の転換や不確実なものへの耐性を身につけ、さらに、言語教育観を更新し、新たな教室の意義を考えることが求められる。

以上のような趣旨の発表を行い、最後に以下の課題が提示された。

【教育実践について】

- ・評価軸は、言語構造についての知識からシフトするようになるのか。
- ・「説明・提示→練習→発展」という旧来のあり方は完全に変化するのか。
- ・教室に集まることの意味（経験の意義）はどのように担保されるのか。

【教師の役割について】

- ・文法説明の巧みさや誤用訂正は言語教育の中で中心的課題ではなくなるのか。
- ・教師の役割（存在意義）はどのように変化するのか。

○報告に対する質疑ならびに全体討議の内容

<山中司先生と牛窪先生のやり取り>

【質問1 (牛窪)】

留学生指導の中で Google 翻訳とかを使って出てきたスピーチのスキプトの出力レベルが高くて驚くことがある。山中先生の実践の中ではその辺をどう扱っているのか。

【回答1 (山中)】

機械翻訳や ChatGPT が出てきたものを修正するのは、大学生レベルではかなり難しい。

できるのはせいぜい単語を変える程度で、文の構造を変える修正はかなり難しいと思う。

日本語を英語に訳し、さらにその英語を日本語に訳すという、いわゆるバックトランスレート (back translate) をさせてみて、原文とどの程度一致しているかを確認するという方法はある。そのようなツールを使う中で、自分の中でルールが発生すると、使えるようになるだろう。

ダウングレードは特に重要で、今後は自分が使えるレベルに落とすための教育も必要になるのではないだろうか。ただ、それをするためには一定の基礎力も必要かもしれない。

【質問2 (牛窪)】

ツールを使うことで、言語を飛び越えてコミュニケーションが取れるというのが興味深い。そうすると、コミュニケーションで大事なものは言語使用の経験ということなのか。

【回答2 (山中)】

キーワードは「経験」。どう経験させるかというのは非常に本質的な問いだと思う。若い学生はテクノロジーを使って話すことに抵抗がない。要するに「通じること」が大事で、彼らは割り切っている。自由社会でただで使えるものがあるにもかかわらず、彼らに「使うな」と言うのはやはり難しい。「コミュニケーションしたい」という気持ちが大事だと思う。

とにかく達成させる、コミュニケーションとして成立させるという経験をさせながら、一方で「でも、この辺はちゃんとやっておこう」といったことをいかに担保するのか。そこを教員側がうまくコントロールできれば、これまでと違ったモチベーションの中で学習者は勉強できるのではないだろうか。今はそれが技術的に可能な時代。それを追求していくことはとても大事なことで、牛窪先生のご発表にあった「言語学習が先あって言語教育はそれを促進するという発想の転換が大事」という話で考えていくと、教育はもっと学習者を巻き込めるようになるのではないかと思う。

次に分科会参加者の方からの質問をいくつか紹介する。

<参加者からの質問>

【質問3 (会場の参加者)】

お二人ともコミュニケーションをさせる中で、学習者がそれぞれの意思、考えを「ことば」にする、プレゼンやグループワークをさせるというお話をされていたが、難しいと感じるのは、評価をどのように設定したらいいのかという問題である。特に公平性の観点から、具体的にどうされているのかを教えていただきたい。

【回答3 (山中)】

評価の話は本質的で難しい問題。生成 AI が出力したものをそのまま評価するというのは、生成 AI を評価していることになるので、それは違う。その意味で TOEIC や TOEFL は今後もなくならないと思う。その人の生身の英語力を測るとするのはそれはそれでいい。自分自身の生身の英語力を知るとするのはとても重要なことだと思う。

要は評価の価値観を変える必要があると思っている。点数が高いから良い、低いからダメというのではなく、適切なダウングレードのために自身の現状を診断的に知る。「情報としての価値」に目を向け、評価に利用できるようになることが本当は理想。そうなれば、これまでのテストもより有益なものになると思う。

【回答3 (牛窪)】

アセスメント (assessment) とエバリュエーション (evaluation) は分けて考えるべきだという話を思い出した。成績と評価は別に考えた方が良いのではないかという話。おっしゃる通り、おそらく定性的評価

にはなるのだろうと思う。

自分は大学でビジネス日本語を担当している。ビジネス日本語にはBJTという試験があるのだが、授業の時にその資格試験についてはそれはそれで各自自分で勉強して一定のスコアを取ってくるよう伝えていく。ただし、その勉強のためのテキストはこちらで制作し、英語と中国語の翻訳もつけ、自学できる体制を作っている。知識はそちらで勉強し、教室の中では別のことをやる形になるわけだが、それらをどう組み合わせるか、そしてそれに生成AIをどのように組み合わせていくかというのが、今後の私の課題になる。

【質問4（オンラインの参加者）】

学習サポートにおいて、いかに優れたテクノロジーを使ったツールが使用可能になったとしても、「英語コミュニケーション力」を向上させることを目的とすると、学習者のモチベーションと継続性という点が重要であることは変わらないと思う。その意味で、山中先生のお話の中で「取り組み甲斐のある課題を出せるかどうか」というお話があったが、AIの活用の可能性、効果的だと思われる課題についてご教示いただきたい。

【回答4（山中）】

テクノロジーが発展し、世の中がどんどん変わっているからこそ、変わらないことに着目することが大事。変わらないのはおそらくコミュニケーションの形態で、発信者と受信者がいて、どんなツールを中に通すかはわからないが、「メッセージを伝え合う」という活動そのものは今後も変わらないと思う。であるとすれば、私たちがどんなメッセージを持って相手に伝えるかという原型を忘れないようにする必要があり、教育をそこに寄せていくことが大事になってくる。その意味で、いかに「我が事にできる課題を作れるか」に尽きると思う。学習者自身が自分にとって本当に意味があると感じるような課題であれば、学習者はやるはずで、自分が本質的にコミュニケーションをしているという実感が持てるような課題であることが望ましいと思う。

スライド1

2024年2月24日(土) 10:00-12:00
キャンパスプラザ京都 第4講義室

大学コンソーシアム京都
第29回 FDフォーラム 第5分科会


ことばの教育はいかに変わる"べき"か

スライド2

趣旨説明

いわゆる生成AI技術の進化に伴い、いま高等教育では従来の教育手法や価値観が見直され、新たな教育のあり方を模索する必要性が高まっている。高等教育におけることばの教育は、コミュニケーション能力を高めつつも異なる文化を理解できるグローバルな人材を育成する上で必要不可欠である。その一方で、生成AI技術の普及により、言語学習のアプローチや教育メソッドが変化し、従来の授業体系とは異なる形での学びも可能となっている。このような文脈の中で、本分科会では2名の専門家にご登壇いただき、高等教育の現状を振り返りつつ、今後のことばの教育や留学生支援の展開(何が変わるのか、いかに変わるのか)について、参加者とともに理解を深めながら、未来のことばの教育の方向性を模索していきたい。

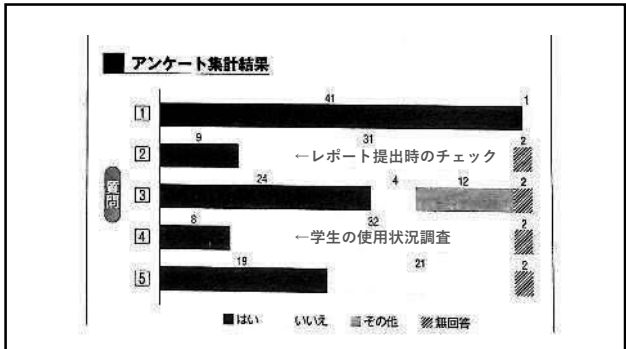
スライド3



- [1] 学生のChatGPTの使用について、大学として見解や方針を策定・公表していますか。
- [2] レポート提出などに際して、学生がChatGPTを使っていないかどうかチェックする仕組みはありますか。
- [3] ChatGPTを利用した授業はありますか。
- [4] 学生のChatGPTの使用状況の調査を行なっていますか。
- [5] 研究者のChatGPTの使用について、大学として見解や方針を策定していますか。

『中央公論 2024年3月号』中央公論新社

スライド4



スライド5

10:00	趣旨説明	住田 哲郎 (京都精華大学 共通教育機構)
10:10	講演	山中 司 (立命館大学 生命科学部) 「ChatGPTの激震は教育に何をもちたらしめるのか? -外国語(英語)教育に焦点をあてて-」
10:40	指定討論	牛窪 隆太 (東洋大学 国際教育センター) 「生成AIは教育実践をどのように変えうるか-日本語教育からの問い-」
11:10	休憩	
11:20	質疑応答	※ 会場 → オンライン
11:50	総括	
12:00	分科会終了	

スライド1



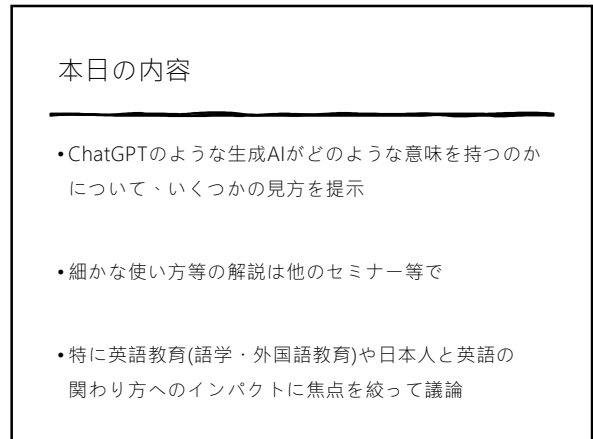
スライド2



スライド3

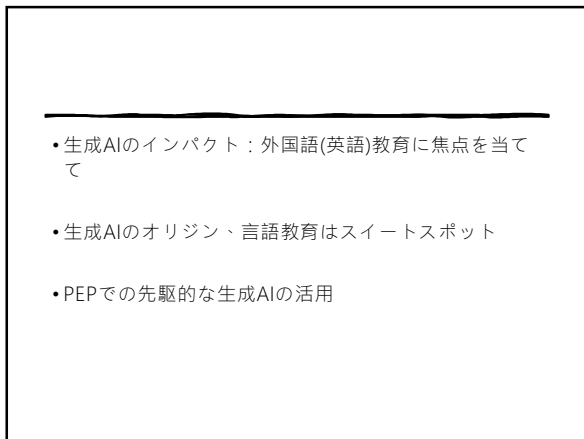


スライド4

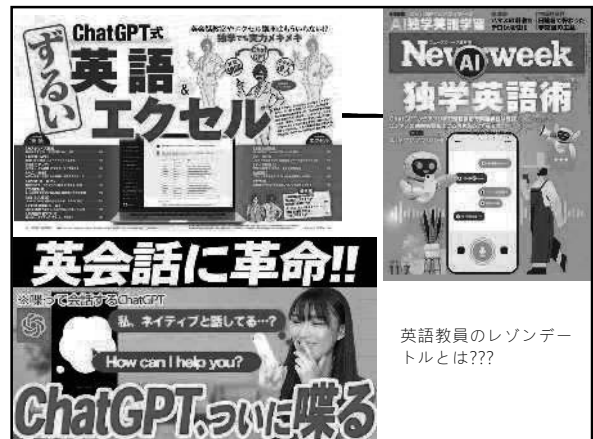


第5分科会

スライド5



スライド6



スライド7

話題の「チャットGPT」、使用経験者はまだ3割以下 世代格差も顕著に



米・Open AI 社が開発し、その使いやすさなどから注目を集めている会話型AI、チャットGPT。現在、バージョン3.5までは無料で公開されており、有料版のバージョン4は従来版より飛躍的に高性能と評価する声も多い。

スライド8



「恐ろしい時代になった」日清に走った生 わずか3週間で全社導入へ

目下、AIの活用が加速している。一方で、AIの活用には課題も存在する。AIの活用には、AIの活用に関する知識やスキルが必要である。また、AIの活用には、AIの活用に関する倫理やセキュリティの問題も存在する。

スライド9

機械翻訳、そしてとどめのChatGPT

- ニューラル機械翻訳によるインパクト→2022年末のChatGPT

e.g. 「髪を全体的に3cmほど切ってくれませんか？」

- Google翻訳
- DeepL
- みらい翻訳
- ChatGPT

スライド10

母語話者の直観
(native intuition)

スライド11

問題

次の例文で、「を」か「に」を選んで補って下さい。
ただしそれぞれの助詞は一度しか使えません。

(1) かぐや姫は 空 (を / に) のぼった。
(2) 龍は 空 (を / に) のぼった。

(山中, 2021: 101)

スライド12

ChatGPTを用いた中高の英作文の指導

- 回答例

In future, I'd like to am famous soccer player. I am going to pratice soccer every day very hard. Some day, I want go Brazil to see good soccer.

(将来、私は有名なサッカー選手になりたいです。毎日サッカーを一生懸命練習しようと思います。偉大なサッカー選手に会いにブラジルに行きたいです。)

(<https://ekaiwa.weblio.jp/cram-school/information/writing/example-of-free-english-composition/>を一部改変)

スライド13

生成系AIと英語教育(1):
なぜ生成AIにいらっとするのか?

- ある種のシンギュラリティの達成
 - Bad modelからGood modelへの移行 (Yamada 2019ほか)
 - もはやサポートにとどまらないAIテクノロジー (山中 2023ほか)
 - 「答え」の解説・・・機械翻訳は優等生、生成AIは教師：メタレベルでの教育のチューニングが可能に
→ 究極のアダプティブ・ラーニング/(ZPD的[ヴィゴツキー;発達最近接領域]な)個別最適化の学びが実現
- 白旗を上げるか? 張り合うか?
 - 教えることの放棄と、教室環境デザインへのシフト

スライド14

機械翻訳の精度の飛躍的向上：
Bad modelからGood modelへ

- かつてはBad modelとしての学習の素材 (山田 2021ほか)
- deep learningによるneural翻訳の導入(それまでは統計翻訳)-専門用語にもかなり対応できるように



スライド15

機械翻訳は英語教育に「激震」を与えている

- ChatGPT(生成AI)は解説までしてくれる
- 英語を学ぶ必要に対する根本的問い
→ 英語(教師)はいらない?
- 少なくとも、機械翻訳(と生成形AI)が使える限り、どんなすぐれた教師よりも24時間365日、「親身になって」、言いたいことを英語で表現することを助けてくれる。
- 英語教師より英語知識のある機械翻訳・生成AI

スライド16

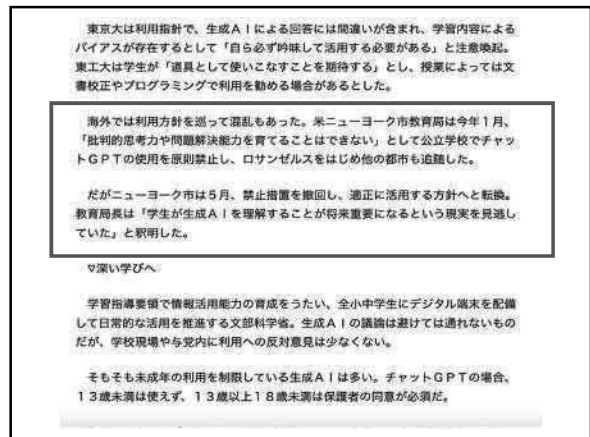
生成系AIと英語教育(2):
AIとの共存は不可避という潮流

- ニューヨーク市の事例
 - 2023年1月・・・ChatGPTの利用禁止を宣言
 - 2023年5月・・・禁止を撤回
 - 「学生が生成AIを理解することが将来重要になるという現実を見逃していた」と釈明 (共同通信/静岡新聞ほか 2023年6月23日)
- 文部科学省「大学・高専における生成AIの教学面の取り扱いについて」(2023年7月13日)
 - 「生成AIは、今後さらに発展し社会で当たり前に使われるようになることが想定されるという視座に立ち、・・・(中略)・・・生成AIを使いこなすという観点を教育活動に取り入れることも考えられる。」

スライド17



スライド18



スライド19

AIテクノロジーとの共存が「賢明」

- 現状、機械翻訳が対応できないのは「話す」「聞く」(同期)
- 「読む」「書く」(非同期)はほぼ100%機械翻訳で対応できる
 - リーディングとライティングはいる???
 - (ただし音声認識+機械翻訳の実装は時間の問題)
- そもそも機械翻訳が使えない状態とは???

スライド20

大きな反応と支持の声

<立命館大学の機械翻訳導入を取り扱ったメディア報道(一部)>

- 立命館大学広報課 プレスリリース、「大学の英語授業に AI 自動翻訳サービスを試験導入：学生・教員の 5,000 人を対象に、翻訳ツールを用いて新しい英語教育の可能性を検証」(2022年10月3日)
- AI自動翻訳「みらい翻訳」ニュース、「立命館大学生5000名にMirai Translator試験導入。英語授業(正課)にも活用」(2022年10月4日)
- NHK、「こえざく「大学生」」ニュース630京いちにち(2022年10月13日)
- 立命館大学Webページ、「大学の英語授業でAI自動翻訳サービスを試験導入：新しい英語教育の可能性とは」(2022年11月28日)
- 立命館大学広報課 プレスリリース、「■PEP Conference 2022 のご案内■「AI時代の大学英語教育—延命か、革命か—: AI 機械翻訳や VR 技術などを駆使した最新の英語教育事例をご紹介」(2023年1月11日)
- 立命館新聞社記事、「英語教育改革へ、正課授業にAIサービスを試験導入」(2023年1月19日)
- 株式会社進研アド/ベネッセホールディングス、「発信力向上をめざし、英語の正課授業でAI自動翻訳を活用—立命館大学」,Between情報サイト(2023年2月27日)

スライド21

生成系AIと英語教育(3): 母語活用の復権

- 「母語話者の直観(native intuition)」と「中間言語(interlanguage)」
 - 英語学習というコスト
- Grammar Translation Method(文法訳読式教授法)の悪夢
 - ✓媒介語としての日本語使用のタブー化と、オールイングリッシュの礼賛
 - ✓Audio-lingual Method, その後のCommunicative Language Approach含め、ターゲット言語の使用を前提とした教授法の実践
 - ✓母語活用の突然の復活 → 教授法の未整備、教授経験の決定的不足

スライド22

翻訳(母語の介在)というインパクト

- Grammar Translation Methodの悪夢の再来???
- 1960年代前後を頂点←(過剰なまでの)批判
- All Englishへの無前提な信仰と母語への敵視
 - 母語干渉、化石化といった(かつての)中間言語論
 - Audio-lingual Methodへの期待と期待はずれ
- 母語を介した外国語教育への再評価
 - 教材は? 教員は? 教案は?

スライド23

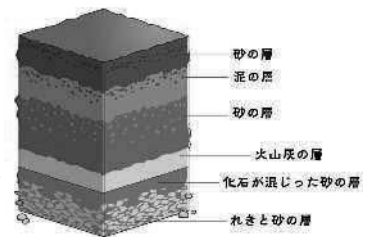
突きつけられている問い

- 全ての日本人が「自力で英語を産出できる力」をつけさせる必要がどこまであるのか?
- ゲームやルールが変わっている可能性(時代錯誤は苦行)
- いつまで必修に? 諸外国語でのくくり? 教養としての外国語?
- コストとしての英語
 - できることなら避けたい、その時間を他に充てたほうがよい

スライド24

時代の根本的な転換点に立っている可能性

- シングularity
ティ(技術的特異点): 人間と人工知能の臨界点
- フーコー(Michel Foucault, 1926-1984)のエピス
テーマ: ある特定の時代のさまざまな科学的言説のあいだに見いだされる諸関係の総体



スライド25

論点: 生成AIの改良の余地: 今の生成AIはまだ教育的でない?

Urlaub P, Dessein E. Machine translation and foreign language education. Front Artif Intell. 2022 Jul 22;5:936111. doi: 10.3389/frai.2022.936111. PMID: 35937139; PMCID: PMC9353394. による(数少ない)指摘



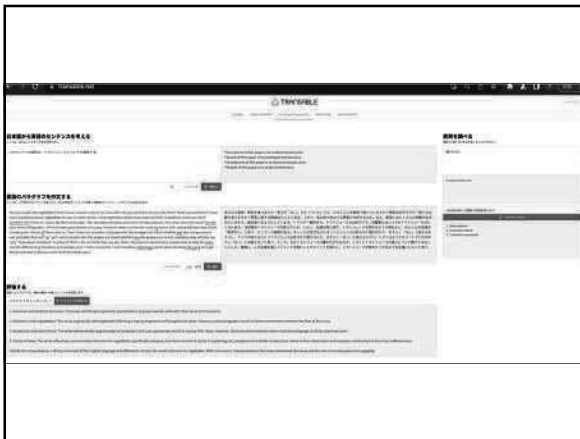
スライド26

TRANSABLEの開発と英語授業での実践 (https://transable.net/)



- GrammatlyとDeepLとChatGPTのAPIを搭載したWebアプリケーション

スライド27



スライド28

英語力のプレポスト比較 (22年4月⇔23年1月)

	GTEC L	GTEC R	GTEC S	GTEC W	TOEIC L	TOEIC R
1年生 (1回目)	109.7	107.1	111.9	112.2	251.7	212.0
1年生 (2回目)	104.1	103.7	120.4	121.3	255.8	241.4
1年生差	-5.6	-3.4	8.5	9.1	4.1	29.4
2年生 (1回目)	116.0	104.1	115.5	121.6	272.1	215.6
2年生 (2回目)	108.3	104.8	117.8	121.4	264.2	233.8
2年生差	-7.7	0.7	2.3	-0.2	-8.0	18.2

黄色箇所は5%水準で有意 (Yamanaka, 2023)

スライド29

機械翻訳/生成AIが本当の原因か?

- 機械翻訳が片棒を担いでいるのは事実
- しかし本当の「悪」は、一生懸命取り組むことがばかばかしくなるような英語教育しかできない教員の側にあるのではないのか? (誇らしい、大切にしたい英文ならば、たとえ機械翻訳に助けてもらったとしても、右から左に訳すだけはしないはず)
- 構図は変わっていない。機械翻訳はその効率を上げただけ

スライド30

機械翻訳/生成AIの悪い使い方の横行

- 地獄絵図 (PEPではほとんど生じていなかったが、) 英語学習へのモチベーションがほとんどない学生、必修だから仕方なく履修している志の低い学生による右から左へ訳す使用の横行
 - ライティング授業: 機械翻訳が訳して提出 (それを添削?)
 - プレゼンテーション授業: 機械翻訳が訳したのを読み上げるだけ (互いにとって苦痛の時間)
- 機械翻訳がバレにくくなっていることも一定作用 bad modelからgood modelへ(0点にはできない)

スライド31

もう一つの問題：「罪悪感」

- 機械翻訳/生成AIを使いたい学生は、「論外な」学生以外にもいる
- 英語に真剣に取り組みたいが、自分の実力だけでは、英語が出てこない、より良い表現(思いもしない表現)が出てこない学生の存在
- 機械翻訳/生成AI = 手抜き、ズル、自己嫌悪の対象・・・「悪」
- good modelによるパーソナルトレーナーの役割 e.g.) 髪の毛を全体的に3cm切って下さい、男女共学

スライド32

機械翻訳・生成AIと逆翻訳が合えば、理論的には何語でも対応が可能



スライド33

授業実践①: 自力、機械翻訳、ChatGPTの比較と考察

- TransableのBETA-2版を使って実際に筆者が行なったのが、学習者それぞれに筆者(教員)によって与えられた直接英語ににくい文章を、1)自力で英訳、2)DeepLを使って英訳、3)ChatGPTを使って英訳させ、それぞれの出力を比較し、クラスの仲間同士で当てたり、特徴を議論したりする授業であった。この授業は多くのメディアに注目され、一躍、本学がChatGPTを活用した先進的英語教育を行なっていると認識されるきっかけとなった。
- 詳細の結果については今後論文として出版していくことを考えているが、ここで見られた学生たちの反応として、しっかりと自分たちで使い分けを考えていることがあった。あえて筆者は、事前にChatGPTの特徴や出力の傾向など一切先行情報として与えなかったが、学生たちは自力の英文と、機械翻訳やChatGPTとの出力の違いをしっかりと考察していた。無論、AIによる出力が備えてレベルが高いことは言うまでもないが、だからと言って、学生たちは機械翻訳やChatGPTの出力に全面的に依存しようとしているかといえばそうではなかった。例として、難しすぎるAIの出力は、いずれ行うことになる発信活動を考えるとき必ずしも得策ではなく、いずれの発信活動の際には何らかの形でダウングレードされる必要がある。逆にこの点に関して自力の英語のシンプルスは、突然のコミュニケーションにも直ちに対応が可能で、発信に適している。自力も、AIも、それぞれにメリット・デメリットがあるわけで、大事なことはこうしたメリットの使い分けに尽きる。自身が本当に発信したいメッセージの場合、想像以上に学生はAIを右から左に使うことで終わりにしなかった。これは、今後のAIの教育への導入に対し示唆的であるといえてよい。

スライド34

授業実践②: ライティング教育のプラットフォームとしてのTransableの活用

- これは、筆者の同僚でもあり、プロジェクト発信型英語プログラムの教員である山下美朋氏らによるグループが、TransableのBETA-3版を使って行なった授業実践である。機械翻訳やChatGPTは従来のライティング教育に破壊的影響を与えるが、それを逆手に取り、むしろライティングの授業で積極的にAIを使うことを目的として設計されたものである。学生はTransableをベースに自力でエッセイ課題を行うが、書く過程での様々なサポートをAIによって受けることができる。一方、この授業の最大の特徴は、Transableを使って、既存の英語アセスメントのルーブリック(TOEFLやGTECなど)を指標とし、それに基づいた評価がChatGPTを介してなされる点にある。これまでこうしたエッセイは、人による採点を依頼するか、もしくは有料で模擬試験や本番のテストを受験し結果を確認するしかなかった。しかしこのサービスを使えば、学習者はAPIの使用料の範囲内ではあるが好きなだけエッセイの評価を受けることができる。ChatGPTのエッセイ評価が、実際の評価の精度とほとんど変わらないことは既にMizumoto(2023)などによって指摘されており、このような意味でも、ライティングの授業や学習の進め方を劇的に効率化させることができるだろう。

スライド35

授業実践③: パネルディスカッションを構想するグループワークへの活用(1/2)

- 2023年7月13日に文部科学省より発出された「大学・高専における生成 AI の教学面の取扱いについて」にもあるように、ブレインストーミングや論点の洗い出しなどについてはむしろ積極的な利用が想定されている。本授業はこうした方針が出される以前(2023年6月)に実施した、ChatGPTをグループワークに用いた取り組みである。
- プロジェクト発信型英語プログラムの2回生の授業では、前半(春学期)にグループ活動を行うことになっており、グループでディベートやパネルディスカッションを行う。これらの特徴は、教員から一方的にテーマが与えられ、単にそれを調べて発表する際のものではなく、自分たちの関心事をもとに、自分たちで構想から運営、実施までを行うことにある。まさに学びの自律性が促され、実行の過程の中での紆余曲折や失敗からも学びを得られる仕組みになっているが、実際にこうしたことを行うのはかなり難しい。普段から仲間との議論に慣れている大学生はそう多くないし、これを英語で行うとなるとさらにハードルは上がるからである。
- プロジェクト発信型英語プログラムでは、最終的なプレゼンテーション時には英語での発信が要求されるが、そこまでのプロセス、つまり議論の構想や詳細の詰めはレベルは母語である日本語を使って構わないとしている。それは思考の言語として学習者が最も得意とするのは母語である日本語であり、言いたいことを言う、一層やりたいコミュニケーションを実行する発信型教育のコンセプトにおいて、母語以外を用いることで、言いたいことの内容に妥協が生じることは好ましくない。ただしもちろん、最終的に考えたことを限無

スライド36

授業実践③: パネルディスカッションを構想するグループワークへの活用(2/2)

- ターゲット言語で言い表すためには、言いたい日本語の内容を「加工・編集」しなければいけない。この意味で、先に述べた通り、常に機械翻訳やChatGPTに頼ることは得策ではない。
- 本授業では、グループで行う英語のパネルディスカッションの構想にChatGPTを用いた、いきなり自分たちでゼロから立ち上げる代わりに、ChatGPTにパネルディスカッションのテーマ、サブテーマ、パネリスト(役割)案、議論の進め方について複数の選択肢を出してもらい、そこにグループのオリジナリティを加える方式で授業を進めた。
- 全てのグループでの実践を記述することはできないが、グループ間々の興味、関心事を打ち込み、これら全ての内容を網羅するテーマを複数挙げることはChatGPTには可能である。そしてその出力を直ちに英語にすることもできる。こうした出力に各グループ驚きながらも、それでも現実上、ChatGPTからの提案にかなり手を加えていたのは興味深かった。もちろん、ChatGPTの出力が一般的な内容に終始していたり、パネリストとして提示された役割が高度過ぎて大学生の自分たちには扱えないといったことが取り急ぎの理由であったが、それでもそこからグループの議論が巻き起こり、結果として、自力でゼロからグループディスカッションを行うよりも、ChatGPTの聞き台から、それを編集し、洗練させていくやり方の方が、議論も活性化し、最終的な内容にも深みが出たように思う。こうした方法論は今後しっかりと追求し、新しいグループダイナミックスのあり方を追求したいと強く感じた。

スライド37

授業実践④: ChatGPTを使ったモチベーションの上がる英語学習法の開発(1/2)

- ChatGPTはテキストベースの会話的やり取りを基本としており、学習者とChatGPTが会話的やり取りを重ねながら、無理のない形で効率的かつ効果的に学習ができる時代がもうすぐそこまで来ている。既に例えば日本史の学習項目を例にした、ChatGPTのプロンプトの例を安藤昇氏などが積極的に発信しているが、こうした事例は、もはや「学ぶ・教える」という行為がAIに取って代わられる可能性を示唆している。考えるべきは、こうした新しい学習のあり方が、既に技術的には十分可能になっていることであり、個々の学びの速度や興味・関心に対応できるAIによるアダプティブ・ラーニングは、教室から一斉授業という形式を葬り去る可能性もある。学習者は自宅学習者、もしくは授業の時間の一部を使ってAIを使って学習し、そのログを提出することで取り組み率や理解度が評価される(そしてその評価もAIによってなされる)日が早晚訪れるかもしれないのである。もはや学習者の学びはAIによって担われ、教室には別の機能が期待されていると考えることは、筆者にとってそれほど無益なこととは思えない。
- そこで本授業ではこうした事例を参照した上で、履修学生たちに自分たちが考えるChatGPTを使った英語学習の方法を考えてもらった。互いに学習法を披露するゲーミフィケーション的な要素を込めた構成としたが、仮に優れた学習法を編

スライド38

授業実践④: ChatGPTを使ったモチベーションの上がる英語学習法の開発(2/2)

- み出したなら、それは大きな社会的インパクトを持つであろうし、何よりも自分たちがやってみたいと思うことで、自主的な英語学習に向かわせることができる。
- 授業では限られた時間で取り組んだため、十分に練った学習法とはならなかった節もあるが、それでも、例文を好きな英語の歌詞にする、専門単語を学習するために自分が日本語で知っている高校の学習範囲を次々と素材に用いる、特定の大学入試の予想問題を作らせて対策が練られるようにする、教養的に(知識として)学べるようにする、自分の好きなアイドルが解説して英文法を教えてくれるなど、実に創造的で興味深い例を散見することができた。少なくともこうした個々の関心や興味、英語のレベルや取り組みたい内容を生成AIが実現してくれる限りにおいて、一斉授業よりも楽しそうであるし、特定の目的達成においては効率も良さそうである。
- 筆者自身は英語教育の「学ぶ・教える」部分はできるだけ早くAIに置き換わったらいと考えていたが、こうした学習者からのリアルな発案を見て、彼らがとても頼もしくなったし、今すぐに変えてもよいのではないかとさえ思うようになった。学びとは本来、必要に思った時に行うものであり、まずは自由で多量なコミュニケーション活動こそが先行されるべきである。


スライド1

生成AIは教育実践をどのように変えるか
- 日本語教育からの問い

東洋大学国際教育センター
牛窪 隆太

スライド2

発表者について



- ・所属：国際教育センター（日本語教育・国際教育）
- ・専門：教師研究、質的データ分析法、実践研究
- ・教育実践：学部正規留学生に対する「アカデミック日本語」、
「ビジネス日本語」、交換留学生に対する「基礎日本語」、
国内生に対する「国際教育」

→ 言語教育の実践者（教師）の立場から、生成AI導入による
インパクト（期待、不安、迷い、懸念）を考える

スライド3

言語教育における「トレンド」

日本語教育における「教え方」をめぐる潮流

- ・長沼直児「直接法」（日本語だけで日本語を教える技術）
- ・オーディオ・リンガル・メソッド（行動主義心理学、反復と習慣形成）
- ・「教授法時代」（心理学の知見：TPR、サジェストベディア、サイレントウェイ）
- ・「コミュニケーション・アプローチ」（メソッドからアプローチへ）
- ・「Peer Learning（協働学習）」（他者との協働における言語学習）
- ・「ナラティブ」への注目（言語構造から語りの内容へ）
- ・「行動中心アプローチ（action-oriented approach）」（CEFR）「できること」
- ・「インストラクショナル・デザイン」：ICTの活用、「デザイン」の視点

→ 日本語の「教え方」は「変わった」のか？

スライド4

言語教育における「トレンド」

- ・「でも、私そういう活動、あまり好きじゃないんですね」
昔の同僚教師との引き継ぎで
- ・「新人のどう教えたらいいかという不安に乗じて、目先の教え方ばかりを
やたら用意して提供することで、日本語教育というのはそのルーティン
をこなすことだという刷り込みが行われている」
日本語学校で働く現職教師のSNSへの書き込み
- ・「聴解練習のときにラップトップを開いていたら、何をしているんですか
と注意された。あの先生は学生を管理しようとする。」
ヨーロッパからの「問題学生」との面談

スライド5

言語教育における「トレンド」

…あるイデオロギーが「支配的である」というのはそういうことです。マルクス主義の場合は、「もう、そのことばづかい、止めませんか？」ということがなんとなく集団的な了解に達したときに、「支配的なイデオロギー」であることを止めました。別に、誰かがマルクス主義を根底的に批判しきったとか、歴史的経験がマルクス主義の不可能性を告知したからではありません。（中略）単にみんなが「マルクス主義的にしゃべるのに飽きた」というだけのことです。

内田樹『寝ながら学べる構造主義』（p.21）

本質的には何も変わっておらず、それぞれの「教授法」を「トレンド」として消費してきたのでは？

スライド6

教育実践を決定するもの

- ・言語教師がもつ「知識」は「信念体系」と密接な関係をもつ
（長嶺，2014）
- ・プロフェッショナルにとって経験学習の質は、所属する組織の
特性と個人の信念によって決まる（松尾，2006）

「経験・知識」は「信念」や「組織」によって左右される
「組織」「信念」にアプローチしないと実際には変わらない？

スライド7

教育実践を決定するもの

生成AIは、教育ツールか学習ツールか？

教育ツール：「導入→練習→発展活動」を効率化するもの？

学習ツール：自律学習ツールとしての可能性は無限大


「導入（提示・説明）→練習→発展」の学習活動の流れを越えるもの（「破壊的イノベーション」※）

※既存の市場で求められる価値を低下させ、新しい価値基準をもたらすもの

スライド8

教育実践を決定するもの


「言語教育」が先か「言語学習」が先か？



教師としては「教育」を考えがち。AIはその反転を加速する？

スライド9

試される立場



事例：


留学生を対象として実施している「日本語プレゼンテーションコンテスト」において「AI時代に日本語を学習する意義」というテーマを掲げた。本選参加者を決めるエントリー審査の際に「chat GPTを使ってエントリーシートを作成した人がある」という通報があり、本選の際にchat GPTの使用をどうするかが問題となった。出場者には使用禁止と伝えるべきか？

【出された意見】

- ・実力で勝負している学生に不公平。使用禁止と明確に伝えるべきでは？
- ・「AI時代に言語を学ぶ意義」がテーマなのに禁止するのはおかしいのでは？
- ・「言語を学ぶ意義」として、各自の判断に任せるべきなのでは？

スライド10

試される立場



実際の対応：

事前研修のときに、日本語ではなくプレゼンテーションの内容を評価すること、Chat GPTの使用については特に規制しないことを伝えた。

結果：

多くの学生が言語学習の意義として「自分自身が経験すること」に言及していた。日本語に多少問題があっても、その人が話す必然性が高く、メッセージが明確に伝わるプレゼンテーションが審査員に評価され入賞した。

【結果から考えたこと】

- ・AIを解禁すると、「日本語」の正確さの評価は無意味化する？
- ・一方、一部の学生にとってはさらに厳しい評価基準となる？

スライド11

現場の教師に必要なこと

【狭義の対応】

- ・できることを知る。
- ・ツールとして活用方法を考える。

【広義の対応】

- ・「教育」から「学習」へと視点を移す。
- ・「教室の意義」（教室経験）を改めて考える。
- ・「不確実なもの」への耐性を身につける。（一とりあえずやってみる）
- ・「言語教育観」（＝「言語観の問題に行き着く」（牛窪、2022））を更新する

スライド12

考えたい点（期待や不安も含めて）

【教育実践について】

- ・評価軸は、言語構造についての知識からシフトするようになるのか？
- ・「説明・提示→練習→発展」という旧来のあり方は完全に変化するのか？
- ・教室に集まることの意味（経験の意義）はどのように担保されるか？

【教師の役割について】

- ・文法説明の巧みさや誤用訂正は、言語教育の中心的課題ではなくなるか？
- ・教師の役割（存在意義）はどのように変化するか？

スライド13

参考文献

- 牛窪隆太 (2022) 『教師の主体性と日本語教育』 ココ出版.
- 内田樹 (2002) 『寝ながら学べる構造主義』 文藝春秋.
- クレイトン・クリステンセン (2008) 『教育×破壊的イノベーション 教育現場を抜本的に改革する』 櫻井裕子訳, 翔泳社.
- 長嶺寿宜 (2014) 言語教師認知研究の最近の動向, 『言語教師認知の動向』 開拓社, pp.16-32.
- 松尾陸 (2006) 『経験からの学習 プロフェッショナルへの成長プロセス』 同文館出版.